

「源氏物語の紫式部」と藤原氏

1. はじめに

高木 義博

- ① 「源氏物語」は時代を超えた傑作小説である。たくさんの人物が三世代、四世代に渡り人間ドラマを繰り広げそれらが有機的に絡んでくる。
心理的描写も素晴らしくまるで近現代の小説の様である。その点が面白い。
- ② 源氏物語の主役となる藤原氏は大化の改新の中大兄皇子(天智天皇)の蹴鞠(けまり)の際 靴が脱げた時素早く拾い届けたのが中臣鎌足。この事から藤原の姓を貰い藤原鎌足と名乗り藤原氏の祖となる。途中藤原四家の内が主流となり藤原道長の頃が北家一番栄えた。当時一条天皇中心に后妃の定子と枕草子の清少納言ともう一方の后妃の彰子と源氏物語の紫式部と競いあった。
これらについて取り上げてみる
- ③ 摂政・関白政治の確立(藤原氏は摂政・関白を常時置くように決める)
幼少の天皇に代わって摂政が決定したり、天皇の決定に関白が参画したりした当時「后妃の父が実権を握る」政治が行われていた。

2. 紫式部と源氏物語の真実

- ① 紫式部はどんな家系に生まれたか
- ② 紫式部の本名はなぜ分からないのか
- ③ 平安貴族の暮らしと仕事
- ④ 平安貴族の服装は
- ⑤ 国家から個別の有力貴族(藤原道長にも) 陰陽師 安倍晴明とは
(上野天満宮は菅原道真を偲んで安倍晴明が作る)



3. まとめ

- ① この物語を読んだ人々は「今迄読んだことがない物語りだ」と思った。また政治的駆け引きも描かれ さまざまな角度から味わう事が出来る。だから男性も読んだし千年も読み継がれて来た。(徳川家の松平定信は 全編を7回も書き写したと言われる) 千年も続くベストセラー本であると言える。
- ② 戦国時代は公家衆は自分達の文化を武将達に公家の文化の切り売りをして生活 飛鳥井雅綱は相模の北条氏や尾張の織田氏を訪れて蹴鞠(けまり)を教え、冷泉為和は駿河の今川氏に身を寄せて和歌を伝授している。藤原氏は「芸は身を助ける」という格言を体現しながら激動の戦国時代を切り抜ける
- ③ 近世 徳川の平和が到来すると藤原貴族達は高貴な血統を生かして将軍家や大名と積極的に婚姻関係を結びその庇護を受けた。大名にとっても公家の縁戚となる事で家名に箔をつけ家臣・領民に対する威信を高められるメリットがあったのだ。そして幕末の尊王攘夷論が巻き起こる中 藤原氏は再び歴史の表舞台に出て政局を動かし維新後は政治家・華族としてステイタスを保った。
- ④ 紫式部の源氏物語の原本は今は無く 手写しで伝わった事は忘れてはいけない。